



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.273  
2026.6.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



## 故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

### 第9回 ◆ 馬渡遺跡の調査終了と遺跡整備 ◆

馬渡遺跡は1964(昭和39)年春頃、茨城県勝田市の一中学生が、那珂川の支流本郷川の谷頭部の古墳ではないところから埴輪片を発見、社会科の先生に報告したことに端を発する。報告を受けた教師2人と生徒2人の4人で現地調査を行い、完形に近い埴輪馬を発見し掘り上げた。社会科担任の工藤は、市教育委員会に報告し、勝田警察署に埋蔵物発見届を提出する。

翌年1月、明治大学大塚初重は、勝田市在住川崎純徳と学部学生阿久津久から埴輪馬発見の報告を聞き、川崎と川上博義茨城県立美術博物館主事と同道の上、埴輪馬発見の場所を訪れ踏査を行い、焼土等を確認、A・B・Cの3地点を確認した。帰途、市役所・教育委員会を訪れ、現地調査の結果を報告する。大塚は研究室に戻り、新発見の遺跡の重要性を研究室の杉原荘介に報告し、今後の調査の協力体制を相談した。

この短期間に、勝田三中学校・茨城県・勝田市教育委員会、明治大学考古学研究室の連携が始まり、4年間におよぶ発掘調査が実施された結果、わが国初の埴輪製作跡として、1969(昭和44)年8月5日、「馬渡埴輪製作遺跡」として14874㎡が国史跡指定を受けたのである。本郷川と中丸川沿いにある十五郎穴横穴が県指定を受けたのが1940(昭和15)年であり、実に30年ぶりの勝田市内における史跡指定であった。

調査前の1965(昭和40)年4月13日に、明治大学文学部考古学研究室教授杉原荘介・助教授大塚初重と勝田市長安義男・教育長安慶造との間に交わされた「馬渡遺跡の埴輪窯址調査にかかる予算処置の申請」によれば、調査は昭和40年8月に第1次調査(約20日間)、41・42年度も同様で、計60日間とすること。調査は勝田市教育委員会と明治大学との共同調査とすること。昭和40年度は、明治大学が15万円の調査費用を用意すること。従って勝田市教育委員会においても、右の額とほぼ同様かそれ以上の費用をお考えいただきたいこと。等々の予算措置を申請している。しかし実際は4年間に7回の発掘調査を実施し、延べ調査日数は115日に達し、昭和41年3月と8月には茨城県教育委員会から計25万円の補助金が支出されたのであった。如何に馬渡遺跡の調査が大変な調査であったかが分かることに、明大考古研・茨城県教委・勝田市教委の3者が綿密な連携を図っていたことを知る。

1978(昭和48)年3月5日は、茨城県・勝田市にとって大きな変換の年であった。勝田市の東海岸に位置する水戸射爆撃場が米軍より日本に返還されたのである。文化財においても、足崎郷の地頭として活躍した鎌倉時代の館跡が志田諄一市史編さん委員らの調査により発見された。さらに発足した文化財保護審議会は、返還された旧射爆撃場内で動・植物調査を行い、自然状態が良好に残されていることを確認している。特に、北半球最南限のオオウメガサソウの群落や、ハマナス、スカシユリ、カワラナデシコ、カワラヨモギに寄生するハマウツボなどを確認した。また海岸部においてハマビルガオ・ハマエンドウ等の海浜植物の植生群落を観察している。

そして、勝田市報第119号(昭和43年12月15日)では、市史編さん室から市史編さんのための基本方針が示された。趣旨として

1. 急速に発展変化する市の姿として、市の生い立ちから発展過程を歴史的に究明する。
2. 市内にある貴重な文化財や諸資料の散逸を防ぎ、これらの資料の収集をはかる。

3. 郷土先人の努力のあとをたずね、現在の姿を後世に伝え、市民の郷土愛の精神を高揚して、将来の発展に資する。

この方針にもとづき、その第一段階として広く市内外にある諸資料の収集調査を行い、「どんなものでも結構ですから、もし、資料をお持ちの方は、積極的なご協力をお願いいたします。」と呼びかけた。

このような経緯を見ると、馬渡埴輪製作遺跡の調査と史跡指定が、市民の郷土意識向上に果たした役割が大であったことが分かるであろう。

この記事は1985(昭和50)年10月28日の新聞で、「馬渡弥生公園7年ぶりに着工」として掲載されているが、これは団地造成に伴う公園のことで、遺跡指定に伴う史跡公園のことはない。遺跡地名は、馬渡字向野であり、開発に伴う団地名を命名するときに埴輪製作にかかわる公園名をというところで、いろいろな候補名があったが、古墳時代の前の弥生時代を採って弥生と冠したもので馬渡「弥生公園」と命名された。これはのちに遺跡公園の一部に組み込まれている。

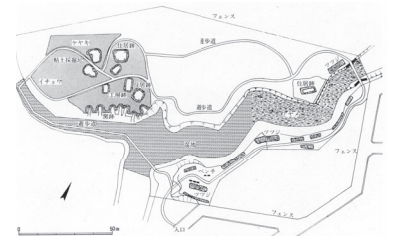
遺跡公園は、1985・1986(昭和50・51)年の2年間をかけて整備事業が行われた。〔「遺跡整備報告書Ⅲ 集落遺跡・製作遺跡 奈良国立文化財研究所 1984.3」

右図が「整備資料Ⅲ」に掲載された時の図面であり、40年経過した今とほとんど変わりはない。右下には団地造成時の道路区画が史跡公園の取り付け道路になり、中央部の旧水田面があやめ植栽となっている。ただし、図面の北側は、森林が伐採され、湧水が枯渇したため、あやめは下流の入口方面に移動している。

整備に対して当時問題となったのは、工房址・住居址・粘土採掘坑跡などの遺構の表現方法であり、特に水田面に傾斜する埴輪窯址の表現であった。この窯址の表現に際しては、馬渡1次調査に来ていた熊野正也の同級生川上元が、信濃国分寺跡の付属窯跡の整備を実施したとのことで、現地でも川上から指導を受けた。その際、信濃国分寺の窯はロストル部が残されているが、カビの処理などでその都度係員が処理をしていると報告を受けた。また窯跡は鉄骨の覆屋の中に保存されているが馬渡の場合は基盤が軟弱であり、加えて自然に囲まれた保存状態では無理があることなどを報告した。報告を受けた大塚は、今後保存処理技術も向上することを考慮し、位置を地上に明示するだけにとどめた。市建設部の河野浩が設計した遺構表示は、窯跡・工房址・住居址等はカラー舗装による平面表示として、見学者がなかに入らないように灌木縁取り植栽(ツゲ)とし、花壇は「さつき」を植栽した。また、アカマツなどの自然発生樹種はそのまま残した。そして遊歩道には自然に戻る特殊な凝固剤を混入し見学者が歩きやすいような硬化作業を実施したのであった。

アヤメ園は、後に行政・地元自治会による管理組織が発足し、あやめ祭りなどの、埴輪公園の催し物などが開催されている。

\*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



## 目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第9回) 鴨志田篤二 …1  
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第27回) 山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第265回) 原田 岳 …3  
■考古学者の書棚「瓦から読み解く古代社会の諸相」 新垣清貴 …4

## 考古学の履歴書

## 考古学とともに歩む(第27回)

山本 暉久

## 27. 神奈川県を退職し、昭和女子大学へ

かながわ考古学財団に派遣され逗子市池子遺跡群の発掘調査と出土品整理に約10年という長い間携わったが、それもようやく終わり一息ついていたころ、財団の調査研究部長であった白石浩之さんが、愛知学院大学へ転職することとなり、その後釜として2000(平成12)年4月、調査研究部長となった。長らく現場勤めであったが、急に調査研究部を統括する責任ある立場となってしまう、財団本部に通う毎日となった。着任早々、横浜市中区、南区、磯子区にまたがる米軍施設米軍根岸住宅地区に面する急崖の防災工事が実施されていた最中、近隣住民から貝層が露出していることとの通報があり、急遽現地の立ち会いをした結果、縄文時代後期前葉を中心とする貝塚であることが判明した。この貝塚は稲荷山貝塚として戦前から知られており、国立博物館に寄託収蔵されている「筒形土偶」が出土することでも著名であった。遺跡はその後煙滅してしまったものと思われていたが、偶然再発見されることとなったのである。その結果、急遽かながわ考古学財団が調査を担当して実施することとなった。当時、県内に残存する貝塚は少なく、遺跡としては保存には至らなかったけれども、残存する貝塚を調査できたことは幸いであったといえよう。

そんなハプニングなどがあったが、職務的にいうと、年間を通じて調査部の職員たちをどう配属させていくかということが、頭を悩ませることもあった。当時、大規模な開発事業が減少していた時期で、それに伴う調査も少なくなっていたのである。数年前までは大規模な公共事業が目白押しで、その調査に貼り付ける職員が足りない状態であったことを思うと雲泥の差であった。それをなんとかやり繰りしなければ、組織として立ちゆかなくなるので、その点が大きな悩みの種でもあった。

そんななか、昭和女子大学のスチュアート・ヘンリ(日本文化史学科長、のちに放送大学教授)さんから、2001(平成13)年度から非常勤講師にならないかとの依頼が舞い込んだのである。早稲田大学第一文学部での非常勤講師は、1998(平成10)年3月に退職しており、3年ぶりにまた非常勤講師となることとなった。文学部日本文化史学科(2003年度から、「人間文化学部歴史文化学科」に改組)と大学院修士課程のコマを担当することとなった。こうして、女子大の非常勤講師となったのであるが、勤務早々、スチュアート・ヘンリさんから連絡があり、櫻井清彦先生が来春退職するので、その後釜として専任教員として採用したいとのことであった。ただ、博士号を取得することが条件であるとのことであった。急に博士号を取得しろと言われても、その準備もなく、いささか焦ったのだが、ままよ、ここはなんとかしなければと思い、これまで研究を重ねてきた「敷石住居址」の研究を博士論文としてまとめることとした。なんとか、仕事の合間を縫ってまとめあげて、母校である早稲田大学大学院文学研究科に提出した学位請求論文により、11月に博士(文学)の学位を取得することができた。この博士論文をもとに、翌2002(平成14)10月、六一書房より『敷石住居址の研究』と題して刊行することができた。初めての単行本であった(写真参照)。また、この業績が評価されて、2003(平成15)年10月に長野県茅野市が宮坂英弉先生を記念して制定した「尖石縄文文化賞」(第4回)を受賞する栄誉を受けた。この賞の第1回受賞者は、私もその立ち上げに加わった「縄文時代文

化研究会」であり、1999(平成11)年12月に刊行した5分冊からなる『縄文時代文化研究の100年』(『縄文時代』第10号)の業績が認められたものであった。そんな関係から、個人としての受賞はないものと思っていたが、思い切って応募したところ、幸いなことに受賞することとなったのである。

「縄文時代文化研究会」は、「昭和」が終わり「平成」へと時代が変わる節目に当たって、鈴木保彦(日本大学芸術学部教授)と戸田哲也(故人・玉川文化財研究所)とともに、全国の若手研究者を中心に呼びかけて立ち上げた研究会であった。縄文時代という時代を限った研究会のモデルとなったのは、かつて刊行されていた「石器時代文化研究会」の機関誌『石器時代』であった。雑誌『縄文時代』は、1989(平成元)年5月に創刊号を刊行した。「縄文時代文化研究会」(代表 鈴木保彦)は、会費制をとらず、趣旨に賛同した者が出資金3万円を拠出することで会員になり、長らく会誌代は徴収せず、刊行ごとに無償で会員に配布してきたが、会誌売り上げが減少し、会の運営に支障が来す危惧が生じたことにより、近年、雑誌刊行ごとに割り引いて会誌代を徴収する形に改めている。2026(令和8)年現在、第37号を刊行し、創刊号を刊行して37年間という長い年月が経過している。発足当時、私も40歳初めの壮年期であったが、今は後期高齢者となり、来春には、「傘寿」という長寿に仲間入りすることとなり、会も世代交代を図っている最中である。今は会員も全国200名を超す研究会として成長している。初期の共同研究の成果は、2001(平成13)年12月に開催した「縄文時代文化研究会第1回研究集会『縄文時代集落研究の現段階』」がある。この研究集会にあわせて、全国各地の縄文時代集落址の様相を知る分厚い資料集と発表要旨集が刊行されている。

こうして、2002(平成14)年3月末日をもって29年間勤めてきた神奈川県職員(かながわ考古学財団時代を含む)を辞することとなった。



▲「敷石住居址の研究」2002

略歴	
1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英弉記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

## リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 265

### 光明寺跡墓地 ～奈良県生駒郡平群町

原田 岳

#### 遺跡の概要

私が今回紹介する遺跡は、生駒郡平群町で中世墓地である光明寺跡墓地です。

光明寺跡墓地(寺脇垣内五輪塔群)は、奈良県平群町の近鉄生駒線元山上口駅から西方約1kmにある椿台という住宅地があり、それらを抜けた生駒山地東麓の南側尾根上に位置します。この墓地には、大小様々な石造遺品が立ち並んでおり、当地域の指定有形文化財(彫刻)となっています。

さて、墓地の北側には開けた場があり、現状耕作地になっているところがあります。現状からは想像しにくいですが、かつてこの地には、櫛原光明寺という律院があったとされています。

#### 櫛原光明寺とは

光明寺跡墓地と密接な関係が指摘されている櫛原光明寺について説明します。当寺は現在廃寺であるため、跡形もありませんが、享保9年(1724)に作成された『村明細帳』の記載からは宗派が律宗で、北室院の末寺であることがわかります。北室院とは、現在法隆寺東院伽藍の北側に所在し、中世には唐招提寺系の律僧が住持する津院で、近世に入ると活発な戒律復興の本拠地となったとされております[細川1994、藤谷2004]。また、『平群町史』によると、「境内無年貢地東西式拾間、南北式拾三間、寺之梁行三間、桁行七間」で、他に二間と二間二尺の釈迦堂と四間の弁財天社などが存在したようです[平群町教育委員会1976]。先述のように葛本隆将氏は、櫛原光明寺について現在南側尾根上にある墓地の北側が耕作地に位置比定をしておられます[葛本2020]。

#### 光明寺跡墓地

現在の光明寺跡墓地は、中央に大型五輪塔があり、その周囲に小型の五輪塔や、舟形光背五輪塔や、無縫塔が配置されています。

最も目を引くのは中央にある大型五輪塔でしょう。この五輪塔は、総高約2.5mを測り、各部材の特徴としては、空輪は涙袋のような形状、風輪は綺麗な半月状、火輪は降り棟が直線上に落ち込み端部のみ反る形態、水輪はほぼ球形、地輪側面観もほぼ正方形で、全体的に均整のとれた造形しています。このような五輪塔は日本全国でよく見られ、その中で資料数が多いのが奈

良県でそのほとんどが13世紀末～14世紀頃のもので、五輪塔の時期の新旧の違いは、主に空輪・水輪外形曲線の様子と火輪の降り棟の形状、地輪の規格にあると考えていますが、光明寺跡五輪塔の場合は、空輪や水輪は緩やかな曲線で、火輪の降り棟が急勾配かつ端部が強く反らないため、13世紀末のもの(同時期のもので1290年銘西大寺奥ノ院五輪塔が挙げられる)と類似しますが、地輪側面観が正方形を呈するなど、14世紀の五輪塔の要素も見られるため、14世紀まで降るとおもわれます。

加えて、この時期に五輪塔が盛んに製作される背景には、律宗の教線拡大の影響が指摘されています[藤澤ほか1993]。葛本隆将氏は、狭川真一氏が僧侶歴代の墓で2代目以降の墓は師祖墓の規模を超えず造営される、という西大寺律宗の造墓パターンの見解[狭川2019]から、光明寺跡墓地の大型五輪塔も本墓地の師祖墓と位置づけています。

さらに葛本氏は、周辺の無縫塔の一つに、「戒雪本明寺」と書かれているものを近世で光明寺の僧侶で法隆寺北室院住持でもあった仁山の墓塔であると考え、仁山が平群町内で複数の墓地造営に関わっていることから、当地域の戒律復興に大きく寄与している人である指摘しています[葛本2020]。また、平群町教育委員会による本墓地の報告書には、この墓地が椿木氏の城である椿木城の西の守りに相当するため、椿木氏の関与があったと指摘しています[平群町教育委員会1991]。

#### おわりに

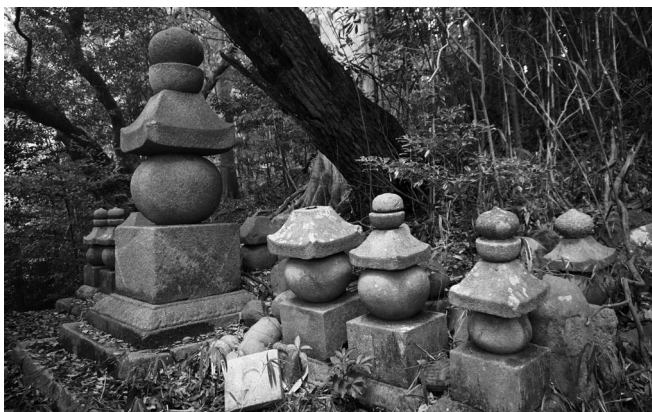
このように光明寺跡墓地の石造物からは、実態が不明な櫛原光明寺の往時の姿を垣間見ることができます。大型五輪塔の形態と配列からは中世律院の姿がみえ、「戒雪本明寺」墓塔からは律院の存在が近世に至るまで継続していたことが指摘できます。また、この墓地の扱われ方として、初期は律僧に関連した墓として機能し、その後椿木氏による在地武士団の墓として吸収されたことが考えられますが、まだ確証がないため、他の資料と照らし合わせて検討しなければなりません。

最後に、この墓地の周辺を見てみると、小型石造物である舟形光背五輪塔や、石仏等が多く並んでいます。おそらく、一般民衆のものと思われ、僧侶墓と在地領主の墓であった光明寺跡墓地が、最終的に一般民衆墓に変化した可能性が考えられます。しかし、光明寺跡墓地が、どの段階で一般民衆墓になったのか、そのプロセスがどういったものであったのかなどは不透明であり、これらを解明することによって中近世移行期の在地社会の本質を見出せるかもしれません。

#### 参考文献:

- 葛本隆将2020「忘れられた近世戒律復興の遺産—本明戒雪と櫛原光明寺」[鳥島 第97号]平群史蹟を守る会
- 狭川真一2009「近畿の中世石塔」[日本の中世墓]高志書院
- 狭川真一2019「墓と石塔の考古学—墓と石造物に戯れて実は半世紀—」(狭川真一さん還暦記念年講演会資料集)狭川真一さん還暦記念会
- 平群町教育委員会1976『平群町史』平群町史編集委員会
- 平群町教育委員会1991『平群町石造文化財 平群谷』平群町教育委員会
- 細川涼一1994「中世の法隆寺と寺辺民衆」(『中世の身分制と非人』日本エディタースクール出版部)
- 藤谷厚生2004「近世初期における戒律復興の一潮流—賢俊良永を中心に」(『四天王寺国際仏教大学院要』大学院第二号)
- 藤澤典彦ほか1993「五輪塔の研究 調査概報:平成四年度」元興寺文化財研究所

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは宮川真聖さんです。



▲光明寺跡五輪塔(筆者撮影)

## 考 古学者の書棚

## 「古代瓦シンポジウム 瓦から読み解く古代社会の諸相 —基礎資料の集成と分析—」

茨城県考古学協会(2025)

新垣 清貴

## はじめに

去る令和5年の9月に茨城県考古学協会の主催による茨城県内の瓦を焦点にシンポジウムが行われた。

茨城県内で古代の瓦をテーマとしてシンポジウムが行われたのが初めての試みであった。自身もこのシンポジウムには実行委員会の動き出しから事務局として関わらせていただく機会を得た。

茨城県内の古代史研究は、『常陸国風土記』という恵まれた良質な史料が残存したことなどから、日本の古代史研究を進めるうえでも看過できない重要な地域のひとつである。これまで県内で実施されてきた数々の研究会、寺院・官衙遺跡の発掘調査の進展にみられることから、県内の古代史研究がいかに重要なテーマの一つであるかが理解される。

今回はそんな久しぶりの茨城県の古代瓦をテーマとしたシンポジウムの話を中心に紹介し資料集を紹介したい。

## シンポジウムと資料集

茨城県における古代瓦の研究は、角田文衛編『国分寺の研究』(1938年)で常陸国分寺瓦を紹介した広瀬栄一氏の報告をきっかけとして、続いて高井悌三郎氏の『常陸国新治郡上代遺跡の研究』(1944年)、『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』(1964年)の研究が発点であったとみられる。その後昭和55年に茨城県立歴史館で古代瓦をテーマとした展示が行われたが、その後しばらくは茨城県内で古代瓦をテーマとした展示や研究発表は行われていなかったのが実情だ。

その後、1994年に黒澤彰哉氏を中心となり、茨城県立歴史館から刊行された『茨城県における古代瓦の研究』では、県内の古代瓦の集成が行われ、各遺跡での古代瓦の文様のあり方や製作技法、組成等が示された点で、学術的に高く評価されるものであった。

この報告が刊行されてから早31年。その間古代官衙遺跡や寺院遺跡、窯業遺跡の発掘調査の進展があった。また、近年は、古代瓦研究の最近の動向は、これまでの軒先瓦の文様を中心とした研究から、窯業遺跡で営まれた手工業の実態や生産地と消費地の需給関係などを細かく分析することで、瓦を製作した工人の技術、組織を考えることは勿論、古代における地方社会の生産と供給の歴史的背景を考える方向に進んでいることがある。課題は、今後このような先行研究を礎にして新たな研究の方向や成果などに反映された総体的な説明の段階に入っていく必要があると思われるが、ひとまず、動き始めの一步としておこなったのが、各郡での資料の実態の把握からであった。平日を除いた週末の土日を利用した集まりは月1ペースで行われた。まず、自治体史や発掘調査報告書を旧郡単位で集めることから始めた。

1994年の古代瓦の集成からどれだけ瓦に関連した遺跡が増えているか。作業は実態調査から始められた。当初、手探りの作業のなか、各郡の担当者によって集められた瓦の遺跡が常陸と旧下総国に入る一部の郡を足しても229遺跡あり、瞬間に厚さ10cmのリングファイル1冊分になった。実際には、リングファイル1冊分をそのまま資料集に印刷するにも予算の限界があった。最終的には、集落遺跡の中から瓦が出土しているパターンや、瓦と

遺構が関わらないパターンの遺跡は巻末で一覧表にしようという意見になった。

もう一つの作業は遺物をしっかり観察することであり、各郡の所蔵先で瓦を観察することで、担当者の考えを実行委員会のメンバー全員で意見交換を行うなど検討会が行われてきた。1994年段階に資料が置かれていた場所も現在では行方が不明なパターンも多い。次世代へと研究を繋ぐにも資料の散逸は防ぎたいし、どこで資料が所蔵されているかを明記することは実行委員全体での共通見解だった。

また、基本的に県内の瓦の悉皆を目標に進めてきた検討会も、コロナ渦の影響を真っ正面から受けてしまった。社会は東京オリンピックの延期とも重なり、2017年から動き始めた実行委員会は当初5年後の2021年開催を目標にしていたが、事実、先の見えないコロナの緊急事態の社会の下、茨城県考古学協会側には何度か延期の説明をおこなってきた。そして、なかには、大人数で資料を観察することができなかったこともあった。

それでも実態調査が叶わなかった郡をごく僅か除き、今回の資料集は茨城県内全域での資料集成となった。

1994年の『茨城県における古代瓦の研究』は最も総論的な茨城県の古代瓦集成であったが、すべてが掲載できなかったことや、数量的な検討が行われていなかった。今回の茨城県の古代瓦シンポジウム資料集では寺院や生産遺跡、官衙、集落も含めて229遺跡に及んだ。これは近年の緊急調査の増加や官衙遺跡の継続的な調査件数が増加したことにもよる。またシンポジウム資料集では、1994年ではできなかったことをやりたい。例えば瓦の数量が出せる遺跡では出来る限り数量を出すことであった。行方郡の井上廃寺や、鹿島郡家の神野向遺跡で初めて瓦の数量が把握された。茨城廃寺でも数量の分析が試みられ、伽藍の造営順序の再検討が指摘されるようになってきた。石岡市では茨城廃寺、常陸国衙跡、国分寺や瓦塚瓦窯跡の調査が行われており、常陸国衙では茨城廃寺系の軒丸瓦を使用した初期国衙の存在が明らかにされるなど多くの事実が明らかになってきたこと多くある。今後は、茨城県の古代瓦を知る入り口となる一冊として多くの方々に一読いただきたい。

## おわりに

かつて常陸国鹿島の神野向遺跡で軒丸瓦を採集した21年前。古代瓦に関心を抱きながら、折りにふれては『茨城県内における古代瓦の研究』を参考にしてきた。今は本棚にもう一つの茨城県の新しい瓦の集成本が並んでいる。

茨城県における古代瓦をテーマとしたシンポジウムが次回、どれくらい後に行われるかはわからない。しかしながら、きっと資料の見方や分析の仕方は今とは異なるだろうし、資料数の増加もまたあるだろう。自分が見た資料の考え方もきっと将来には違った見え方になっていると思う。常に遺物を見ることは新しい発見かもしれない。

## アルカ通信 No.273

発行日 2026年6月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp